

2015 FIM世界耐久選手権シリーズ第2戦  
“コカ・コーラ zero”鈴鹿8時間耐久ロードレース 第38回大会  
三重県・鈴鹿サーキット(1周=5.821km)  
予選:22番手(2分10秒791)  
決勝:DNF  
天候:7月24日(金)快晴 路面:ドライ  
7月25日(土)快晴 路面:ドライ  
7月26日(日)薄曇り 路面:ドライ  
観客動員数:120,000人(4日間合計)

# TEAM TENMEI 桜プロジェクト

Race Report  
2015 Suzuka 8 Hours FIM Endurance World Championship

**Coca-Cola zero.** 2015  
**Suzuka 8 hours**



## FUKUSHIMA HAMA-KAIDO SAKURA PROJECT

### ふくしまの子どもたちの思いを乗せて完走したかった

TEAM TENMEI 桜プロジェクトとして2年目となる2015年の鈴鹿8耐は、福島の子どもの思い、保育園児が描いた桜の花の絵をマシンのカラーリングの一部として右側が緑を左側がピンクを基調としたデザインは、一際目を引く。昨年は、マシントラブルで悔しいリタイアをしているだけに今年こそチェッカーフラッグを受けることを第一目標に、結果をしっかり残していくことが責務だった。

ライダーは、チーム代表兼エースライダーの高橋英倫を中心にベテランの東村伊佐三、チームのムードメーカーでもある井上哲悟という昨年と同じメンバー。チームのまとまりもよく、事前テストから大きな

トラブルもなくマシンのセットアップを進めてきた。

レースウイークに入ってから大きな問題はなく、決勝で完走することを基準に、一つ一つ課題をクリアして行っていた。今年は、84台ものエントリーを集めたため公式予選は2グループに分かれて行われた。Bグループの出走となり、まず第1ライダー枠で東村がアタック。2回目のセッションで2分10秒964をマークし10番手につける。第2ライダーの井上は、ユーズドタイヤでアベレージタイムを伸ばすことに集中し台数が少ない第3ライダー枠で高橋がアタック。2分10秒791のチームベストをマークし、組11番手となり22番手グリッドからスタートすることになった。

# TEAM TENMEI 桜プロジェクト

2015 Suzuka 8 Hours FIM Endurance World Championship

Race Report



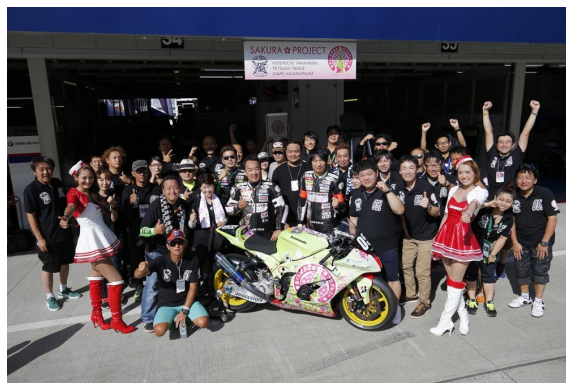
FUKUSHIMA HAMA-KAIDO  
SAKURA PROJECT



今年も現役MotoGPライダーが参戦するなど、話題が豊富だった鈴鹿8耐。決勝日だけで68,000人もの大観衆を集めていた。天気も青空が広がり厳しい暑さに見舞われた。朝8時30分から行われたウォームアップ走行では、決勝に向けて最後の確認作業に入ったのだが、ここでミッションラブルが発生！ここから歯車が狂い始めてしまう。マシンを検証し、メインカーを使うことを諦め、スペアカーにメインカーの足回りを組み替え、ギリギリでスターティンググリッドにマシンを並べていた。スペアカーのエンジンはフレッシュ状態ではなかったことから、回転数を抑えつつ必ず完走しようという作戦だった。

そしていよいよ11時30分にレースはスタート。スターティングライダーは、今年も東村が務め、マシンの状態を確認しながらペースを上げて行く。東村から変わった井上も早め早めのシフトチェンジでエンジンをいたわりながら走っていたが、クラッチの切れが悪くなってきていた。その症状は、高橋の1ステイント目には、さらに悪化。それでも何とか東村が2ステイント目に出て行くが、セーフティーカーが入ったときにクラッチの状態は限界だということをピットに知らせていた。そして、修復準備が整うと東村をピットインさせメカニックが必死に作業を行うが、大きくタイムロスしてしまう。そして修復が終わると井上はピットアウトして行く。井上はエンジン回転数を抑えながら、前に目標となるライダーを置き順調に周回を重ねているように見えた。ルーティンの周回を1周、また1周とこなし残り2週のサインボードを見た周だった。ホームストレートで異音を聞いた井上は、集団で走っていたため、すぐにスローダウンはできなかった。S字コーナーをクリアし逆バンクから左高速コーナーに入ったときに再び異音がしたためエンジンをカット。そのまま惰性でデグナーカーブを周り立体交差先に止まりマシンを確認するがエンジンは息を吹き返すことはなかった。しかし、ふしまの子どもの思いを乗せて、ここまで走ってきた。何としてもチェッカーフラッグを受けようとマシンを押し始めた。オフィシャルの指示とヘルプもあり、コースを逆走する形でデグナーカーブから130Rのアウト側を通り炎天下の中、坂を押し上がり、何とかピットまでたどり着いた。残り1時間半というところだった。メカニックはマシンの状態を確認するが、残り1時間での修復は不可能と判断。そのままリタイヤという苦汁の選択を余儀なくされてしまった。

今年こそ完走を果たしたかったが、鈴鹿の女神は微笑んでくれなかった。しかし、ここまで努力してきたことは決して無駄ではない。来年こそチェッカーフラッグを受け、花火をみんなで見たいところだ。



## 第1ライダー 高橋英倫

「今年もチェッカーフラッグを受けることができず本当に悔しいですし、応援してくれた多くの方に申し訳ない気持ちです。何より、ふくしまの子どもたちの思いを乗せて完走したかったので結果は残念でしたが、炎天下の中、必死にマシンを押しピットに戻って来てくれた井上選手を始め、チーム全員が精一杯やってくれたことに感謝したいです。チームとしては成長できましたし、これも一つの試練として受け止めて、また来年チャレンジしたいと思っています。今年も多くのご支援、ご声援ありがとうございました」

## 第2ライダー 東村伊佐三

「去年のこともありましたし、今年は、絶対に完走しようと臨みましたが、最後まで諦めることなくゴールを目指しました。井上選手もマシンを押し帰ってきてくれましたし、メカニックも必死にマシンを直そうと努力してくれましたが、残り1時間では修復できない状態でした。改めて鈴鹿8耐の難しさを感じましたね。結果は残念でしたが、精一杯努力した結果なので充実した気持ちはありますね。来年は3度目の正直で必ず完走したいですね」

## 第3ライダー 井上哲悟

「完走することができず、すごく残念です。ふくしまの子どもたちを始め、多くの応援してくれている方の思いを乗せていましたし、何とかゴールしたかったので必死にマシンを押ししました。その際にコースオフィシャルの方が水をくれたり、励ましてくれたのでピットまで戻ることができました。すごく感謝していますね。チームもすごく頑張ってくれましたし、その思いにも応えたかったので悔しいです。来年こそチェッカーフラッグを受けたいですね」

このリリースに関するお問い合わせは以下までメールでお願いいたします。

E-Mail: takahachi02@yahoo.co.jp